

◎特集「日本長寿社会」のパラダイムシフト (続)

堀内正範

「月刊丈風」編集人 朝日新聞社社友 (元『知恵蔵』編集長) 高連協オピニオン会員

<http://jojin.jp> mhori888@ybb.ne.jp

史上初・国際的に先行する「日本長寿社会=超高齢社会=三(四)世代多重型社会」の新たな内容を盛るために、本誌では新しいことば(器)を用いています。前世紀後半期と比較して21世紀初頭の新しい社会を表現するために必要だからです。

世紀をまたいで21世紀の初頭にこの国で暮らす高齢者(65歳以上の「支える側の高齢者」=現役シニア=昭和丈人)層が中心になって、独自の文化や伝統を活かして、これまでない「成熟した姿のモノ・居場所・しくみ」をつくること。

ひとつひとつは水玉模様のように小さくていい。それが重なり合って「日本長寿社会」をつくることになるのですから。国連が提唱する「高齢者五原則」(自立・参加・ケア・自己実現・尊厳)を体現しながらひとつひとつプロセスを重ねて、平和裏に国際的な「高齢社会」の成功モデルを達成することになります。

青少年・中年者・高年者がそれぞれに安心して暮らして、「人生の豊かな成果」を享受できる社会が「日本長寿社会」の姿です。「20世紀後半期の人生65年社会」から「21世紀初頭の人生90年社会」へ。わたしたちの活動は、新たなパラダイムシフトを考案しながら、「すべての世代のための社会づくり」を展開してまいります。

20世紀後半期の社会

- ・「人生65年時代」 →
- ・支えられる高齢者 →
- ・「二世+α型」社会 →
- ・「成長」力の時代 →
- ・標準家族・一人暮らし高齢者 →
- ・還暦・古希・喜寿・傘寿・米寿 →
- ・余生・孫育て →
- ・少子・高齢化社会 →
- ・ピラミッド型・瓢箪型人口構造 →
- ・団塊世代(昭和22~24年生) →
- ・青少年期に能力養成 →
- ・生涯学習 →
- ・国土の均衡ある発展 →

21世紀初頭の世界 (◎今号の課題)

- ◎「人生90年時代」(65+25年人生)
- ◎支える側の高齢者・現役シニア・昭和丈人
- ◎「三世+α型」社会
 - ・「成長・成熟・継承」力の時代
 - ・三世同居・近居・地域包括ケア
 - ・賀寿期五歳層ステージ
 - ・自立・参加・ケア・自己実現・尊厳
(国連「高齢者五原則」)
- ・高齢社会・超高齢社会・長寿社会
- ・釣りがね型人口構造
- ・平和団塊世代(昭和21~25年生)
- ・高齢初期(60~65歳)に2回目の能力養成
- ・地域大・大学校
- (とともに) ・個性ある地域の発展

◎ 20世紀後半期の社会から21世紀初頭の新たな社会へ

・「高齢化社会」(高齢化率7%~14%・1970年~1994年)

この時期にはなお若年者・中年者による「成長活力」が中心であり、少数であった高齢者は「支えられる」側において、善意の「二世世代+ α 」型社会で手厚い「社会保障」(医療・介護・年金など)を受けて、敬愛されながら静かにそれほど長くはない「余生」を送って、後人にすべてを託して去ることができた。20世紀後半のよき「高齢化」時代であったといえよう。

・「高齢社会」(高齢化率14%~21%・1994年~2007年)

この時期になると、高齢者の姿が目立つようになり、若年者・中年者による「成長活力」とともに、高年者(65歳以上)が保持する知識・技術・資産といった潜在力を駆使して、「成熟・継承活力」による新たな「高齢社会」の形成が必要であった。新たな「モノ・居場所・しくみ」づくりである。職域づくりであり地域づくりである。

世紀末の1999年に開催された「国際高齢者年」を通じて国連が要請したのは、21世紀を新たな平和の世紀とする高齢者参加の「長寿社会」の形成であった。自立し社会参加に意欲的な「支える側の高齢者」の登場で、この事業を国際的に先行する立場にある日本は、国政の場で衆議して「構想(グランドデザイン)」を掲げ、世界初のモデル事業を公開しながら展開する局面にあったのである。

が、まことに残念なことには政治家にその視野がなく、全国的チャンスであった「市長村合併」の場でもそういう機運は起こらずに不在のまま経緯したことが悔やまれる。「100年安心年金」(2004年)も、この基盤なしには「安心年金」になりえなかったのである。その結果、消費税による財源確保という悪路に踏み込むことになった。

・「超高齢社会」(高齢化率21%~・2007年~・2012年は高23.3%)

高齢者による高齢社会形成の時期を過ぎて、この時期には、「三世代多重型社会」への展開がなされる時期にある。青少年・中年・高年世代がそれぞれの立場で「長寿社会」を考えるために「三世代会議」が必要となる。そして青少年・中年者による「成長活力」とともに、高年者(65歳以上)の保持する知識・技術・資産を活かした「成熟・継承活力」による「日本長寿社会」の達成が目標となる。三(四)世代がそれぞれの立場で参加する史上初・国際的に新たな21世紀型社会の形成過程にある。

・「人生65年時代」 → ・「人生90年時代」(65+25年人生)

平均寿命でみると、

1955(昭和30)年 男 63.60 女 67.75

1960(昭和35)年 男 65.32 女 70.19

1985(昭和60)年 男 74.78 女 80.48

2010(平成22)年 男 79.55 女 86.30

20世紀後半に「人生65年時代」が長くいわれ、いまでも国際的指標としては実用

にされているが、わが国の場合はその後に急速な延伸がみられ、新世紀にはいったころには「人生80年時代」に、そして今般、「高齢社会対策大綱」の改訂によって、「人生90年時代」が指摘された。65歳のころに以後25年の「第三期の人生設計」を想定することになる。

・支えられる高齢者 → ・支える側の高齢者・現役シニア・昭和丈人

20世紀後半の「人生65年時代」には高齢者は「支えられる高齢者」として医療・介護の対象として扱われた。2012年改定の「高齢社会対策大綱」においては、「人生90年時代」の「支える側の高齢者」（現役シニア・本稿でいう昭和丈人）が指摘され、「高齢社会」形成の主演となる。いうまでもないが、加齢による「体・志・行」面での衰弱、有訴の進行、医療・介護の必要など、「支えられる側」にある高齢者への配慮はわがことのうちである。

・「二世世代+ α 型」社会 → ・「三世世代多重型」社会

「人生のライフサイクル」として、個人的には青少年・中年・高年期があり、社会的には青少年・中年・高年世代がいる。そのうちの青少年・中年世代を「現役世代」とし、高年者を「被扶養者」として扱うのが「二世世代+ α 型」社会であり、人口比で2割を超えた高年者が自立して新たなコミュニティや居場所や日用品などをつくって暮らすのが「三世世代多重型」社会である。21世紀型社会というのは、平均寿命延伸・高齢者増による単なるエージング（ゴムひも型高齢者社会）ではなく、新たな多重構造をもつ成熟社会である。